

龍谷大学西域研究叢書 6

大谷探検隊収集西域胡語文献論叢

仏教・マニ教・景教

入澤 崇・橘堂晃一（編）

2017

龍谷大学仏教文化研究所 西域文化研究会
龍谷大学世界仏教文化研究センター

京都

Ryukoku University Silk Road Studies 6

*Essays on the Manuscripts written in Central Asian
Languages in the Otani Collection*

Buddhism, Manichaeism, and Christianity

IRISAWA Takashi, KITSUDO Koichi (eds.)

2017

Research Institute for Buddhist Culture, Ryukoku University
Research Center for World Buddhist Cultures, Ryukoku University

Kyoto

刊行の辞

龍谷大学西域文化研究会は、大谷探検隊が中央アジアから将来した文化財の整理と研究を使命として、国内の研究者を招聘し、1952年に発足しました。その成果である『西域文化研究』一～六（全七冊）（法蔵館：1958-1963）は、当該資料に対する最初の総合研究として夙に知られており、日本における中央アジア研究に大きな足跡を残しました。

その後も井ノ口泰淳・龍谷大学名誉教授、上山大峻・龍谷大学元学長、小田義久・龍谷大学名誉教授、百濟康義・龍谷大学名誉教授（故人）が中心となり、国内外の関連機関と連携して、資料の整理研究を進めてまいりました。その成果の一端は龍谷大学善本叢書として結実しています。

また、近年は中国旅順博物館に分散した大谷探検隊将来資料のうち漢文仏典、非漢字資料について、同館との共同研究プロジェクトを立ち上げ、同資料に対するデジタル化と研究を進めています。

『西域文化研究』の出版から60年以上が経過した現在、シルクロード研究をとりまく環境は劇的に進歩し、これまで手付かずだった資料にも光をあてることが可能となっています。この間、大谷探検隊将来資料に対して、仏教学、言語学、歴史学、美術史学の研究者によって個別に研究が進められてきたことは言うまでもありません。このような状況に鑑みるにつけ、最新の成果を取り入れた『西域文化研究』を再版することの必要性を切に感じます。しかしながら、あのような巨冊を再び世に出すことは容易なことではありません。

そこでこの度は、まず大谷探検隊が収集した胡語資料（非漢字資料）に焦点をあてた論文集を西域研究叢書6として発行することにしました。日本在住の研究者に声をかけた所、8本の専論を掲載することができました。大谷探検隊収集資料を中心に据えてはおりますが、ドイツ、イギリス、ロシアなどに分散する資料、そして写真だけで残る資料との照合は不可欠となっており、本書でも取り上げられています。内容としても仏教、マニ教、景教をテーマとする論考が集まり、図らずもシルクロード宗教史を知る上でも格好の論文集となりました。執筆者の皆様には、この場を借りて厚く御礼申し上げます。

ところで『西域考古図譜』に掲載されている大谷探検隊収集資料の中には、その後、所在が分からなくなっているものが少なからずあります。事実、この論文集で

扱われた写本のいくつかもそれに該当します。昨年 11 月に横浜で行われたオークションでは、これまで所在不明となっていた大谷探検隊収集資料が出品され、私たち研究者を驚かせました。残念ながら本論文集の資料は含まれていませんでしたが、このオークションは、行方不明の資料が今もどこかに眠っている可能性を示しています。私たちの研究活動が大谷探検隊への関心を喚起し、将来、所在不明となっている資料が一つでも再発見されることを願ってやみません。

2017 年 3 月

龍谷大学文学部教授・西域文化研究会代表

入澤 崇

目 次

刊行の辞	i
入澤崇	
大谷探検隊将来トカラ語資料をめぐる (3)	1
萩原裕敏・慶昭蓉	
「橋資料」中のクチャ・カローシュティー文字 (Kuĉā-Kharoṣṭhī) 木簡について	31
慶昭蓉 (萩原裕敏訳)	
Manichaean Turkic Texts in the Ōtani Collection of the Library of Ryūkoku University	45
Peter ZIEME	
高昌故城寺院址 a のマニ教徒と仏教徒	71
松井太	
大谷探検隊将来ウイグル文『大乘入道次第』残葉	87
橋堂晃一	
New Light on the <i>Huayan jing</i> in Old Uighur from the Krotkov Collection and Yoshikawa Photographs	105
KITSUDO Koichi	
中国, トルファンおよびソグディアナのソグド人景教徒 —大谷探検隊将来西域文化資料 2497 が提起する問題—	155
吉田豊	
大谷探検隊将来資料中のシリア語断片	181
高橋英海	

CONTENTS

Preface	i
IRISAWA Takashi	
The Tocharian Manuscripts kept in the Ōtani Collection: Part III	1
OGIHARA Hirotoši and CHING Chao-jung	
On the Kučā-Kharoṣṭhī Wooden Tablets in the Ōtani Collection devolved from TACHIBANA Zuicho	31
CHING Chao-jun (translated by OGIHARA Hirotoši)	
Manichaean Turkic Texts in the Ōtani Collection of the Library of Ryūkoku University	45
Peter ZIEME	
Manichaeans and Buddhists in Coexistence at Temple α of Qočo	71
MATSUI Dai	
A Pothi Manuscript of the <i>Daicheng rudaο cidi</i> in Old Uighur	87
KITSUDO Koichi	
New Light on the <i>Huayan jing</i> in Old Uighur from the Krotkov Collection and Yoshikawa Photographs	105
KITSUDO Koichi	
Christian Sogdians in China, Turfan, and Sogdiana: Problems raised by a Christian Sogdian text Ōtani 2497	155
YOSHIDA Yutaka	
The Syriac Fragments in the Ōtani Collection at Ryukoku University, Kyoto	181
TAKAHASHI Hidemi	

大谷探検隊将来資料中のシリア語断片

高橋英海

大谷探検隊将来資料中にはトルファンで出土したと考えられる3点のシリア語断片が確認される。残念ながら、本稿の執筆に際して断片の現物に触れる機会を得なかったが、以下では龍谷大学仏教文化研究所の橋堂晃一氏より提供していただいた写真から読み取れる内容について記す¹。

断片の出土地と年代

トルファン出土のシリア文字文書としては、ル・コック隊がドイツに持ち帰ったものがよく知られ、1,000点以上の断片があると報告されている。シリア語のほか、シリア文字で記されたソグド語、近世ペルシア語、古ウイグル語の文書も含まれ、内容的には聖書、典礼書、聖人伝などのほかに哲学書の断片などもある²。現在ベルリンにある断片のほとんどはブライクの修道院跡とされる遺構で発見されたものだが³、高昌故城、センギム、トヨク、クルトカで出土したと報告されるものもある。

1 本稿の執筆を勧めていただいた Peter Zieme 教授をはじめ、貴重な情報や示唆、資料の提供をいただいた吉田豊教授、Mark Dickens 氏、Grigory Kessel 氏、Natalia Smelova 氏、田中創氏、Jack Tannous 氏、David Taylor 氏に感謝の意を表す。なお、龍谷大学の大谷隊将来資料中のキリスト教文書としては、この3点のシリア語断片のほかに西域文化資料 2234（ウイグル語、Zieme 2015b 参照）と 2497（ソグド語、百濟他 1997: 解説編 76f., 函版編 18, 吉田「中国, トルファン」および本稿註 51 参照）がある。

2 ベルリンのトルファン出土シリア語文書、シリア文字ソグド語（およびペルシア語）文書、キリスト教（シリア文字およびウイグル文字）ウイグル語文書については、それぞれ Hunter & Dickens 2014, Sims-Williams 2012, Zieme 2015a: 41–146 を参照。なお、これらのシリア語およびシリア文字ソグド語断片のほとんどは国際敦煌プロジェクト (IDP) のウェブサイトで画像を閲覧することができる。

3 大量のキリスト教文書が発見されたブライクの遺構がキリスト教関係の施設であったことはほぼ間違いないが、これまで詳細な発掘調査は行われていないため、それが修道院であったという確証はない (Barbati 2015: 92–97 参照)。

ベルリン以外では、サンクトペテルブルクにもトルファンで出土した3群のシリア語典礼書の断片があり⁴、そのうちの1点(Syr. 14)はアスタナで発見されたものと報告されている。現在龍谷大学にある断片の出土地は記録されておらず、3点が同一の場所で発見されたのかも不明だが、大谷隊が調査を行っていないブライクではなく、高昌故城内などで発見された可能性が高い⁵。

トルファン出土シリア語文書のなかに奥付などによって年代を確定できるものはないが⁶、これらの文書は、通常、西ウイグル王国の時代に相当する9世紀から13世紀ないしはモンゴル時代も含む14世紀までの間のものとされる⁷。また、現在の中国領内ではトルファン以外にハラホト、敦煌、北京でもシリア語写本の断片が見つかっており、これらはいずれもモンゴル期のものと推定されている⁸。

ここで扱う3点は、その書体の特徴から判断しうるかぎりでは、いずれもトルファン出土シリア語文書のなかでは比較的遅い時代のものと思われる。トルファン出土文書の多くの書体はエストラングラー書体もしくは後の東シリア書体への移行期の

4 (1) ロシア科学アカデミー東洋写本研究所 Syr. 14 (クロトコフ隊将来, 1葉: Pigoulewsky 1935–36: 31–39, ead. 1940: 224f., 233f., Таблица III, фиг. 2, ead. 1960: 154–156 [no. LVII] 参照). (2) Syr. 40 (1914年セルゲイ・マロフ将来, 1葉). (3) Serindica [SI] 5844 (クロトコフ隊将来, 約97片/18葉: Meshcherskaya 1996, ead. 1998 参照). 以上のサンクトペテルブルクの断片については Natalia Smelova 氏より教示をいただいた (Smelova 2015: 221f. 参照).

5 吉田「中国, トルファン」参照.

6 Hunter & Dickens 2014 でも個々の断片の年代についての検証は行われておらず, Hunter 自身が別の論文で年代を論じている SyrHT 41, 42, 43 以外については先行研究での推定に言及しているのみである (Hunter & Dickens 2014: 1, 6f., 16f., 53f., 112, 321, 323, 325f., 346 参照). ただし, シリア語文書のなかで最もまとまった形で残る典礼書写本 MIK III 45 については炭素年代測定による「771年～884年」という鑑定結果がその後報告されている (Hunter 2016: 90, 100).

7 Hunter 2012b: 304, Dickens 2013: 10f. 参照. サンクトペテルブルクにある断片群 SI 5844 については Meshcherskaya (1996: 226, ead. 1998: 155f.) は13～14世紀のモンゴル時代のものである可能性が高いとしている.

8 ハラホト出土シリア語およびシリア文字ウイグル語写本の年代については Smelova 2015: 216, 219f., 敦煌出土シリア語写本のうち1点(以下, 敦煌出土シリア語写本 A)の年代については Klein & Tubach 1994: 11f. および Kaufhold 1996: 59 を, B53 窟出土のもう1点(B53: 14)の年代については段 2000: 124f., ead. 2001: 91 を参照(写本 A の図版は Klein & Tubach 1994: 446, B53: 14 の図版は彭他 2000: 彩版 19, 20, 段 2000: 121, ead. 2001: 86f. にあり). 1920年代に北京の紫禁城午門上で発見された典礼書断片(現在の所在は不明)については佐伯 1935: 751–790, id. 1937: 315–333, Taylor 1941 を, 台北の中央研究院歴史語言研究所傅斯年図書館で発見されたほぼ確実に同じ写本に由来する別の断片については Muraviev 2012, Zieme 2015a: 147f., Tang 2015: 81f., n. 61 を参照.

書体に分類できる⁹。トルファン出土文書の多くではエストラングラー書体の顕著な特徴である「三画書きのアーラフ (three-stroke alaph)」ないしはその変形が維持されているのに対し、龍谷大学の3点では語末のアーラフ (ʿ) はほぼすべて縦線一本の新しい形で現れており¹⁰、資料 2022 および 6221 では語頭 (独立) 形でも旧式のアーラフは確認できない¹¹。資料 2022 と 6221 の間では、2022 のダーラト (d) とレーシュ (r) はより角ばった旧式に近いものと丸みを帯びた新式のものが混在し、ミーム (m) もやや角ばった形を保っているのに対して、6221 のダーラトとレーシュはすべて丸みを帯びた勾玉型で現れ、ミームもより丸みを帯びているなど¹²、後者の方がより草書体的 (cursive) な印象を与える。もう一点の資料 1789 は特異な書体で記されており、古い時代の書体の特徴と新しい要素の両方を含む。資料 1789 のダーラトとレーシュは原則として角ばった形を保ち¹³、独立形のアーラフは古典的な「三画書きのアーラフ」となっている。ミームは他であり見ない独特な菱形をしているが、類型的には角ばって下に口が開いた古い形のミームに近い。同時に、資料 1789 表面 5, 6, 10 行では後代の東シリア書体で一般的となる形の -t' の合字が認められることが注目される。このような合字は年代が確定できる写本では 13 世紀中頃に初めて出現したとされるものであり、敦煌出土シリア語写本 A を 13 ~ 14 世紀のものとする根拠ともなっている¹⁴。書体による年代の推定の際には、聖書や

9 バルリンの文書に見られる書体の全般的な特徴については Dickens 2013: 11 および Hunter & Dickens 2014: 12, 16 を、Hunter が 13 世紀中頃のもののみならず SyrHT 41, 42, 43 の書体については Hunter 2012b: 343 を参照。トルファン出土文書と同様の特徴を示すサントペテルブルクのハラホト出土シリア語文書の書体については Smelova 2015: 224-230 参照。

10 資料 2022 表 A3 行には縦線が右に大きく傾斜する、逆コの字型の語末形アーラフらしき字が見られるが、これも「三画書き」ではない。

11 資料 6221 で確実に独立形のアーラフと断定できる文字は表面の表以外にはないが、この表のアーラフは新型の L 字型のアーラフである。

12 ただし、資料 6221 で確実に m と判読できる文字は裏面 2 行のもののみである。

13 ただし、裏面 4 行, 5 行の r や 6 行の d などは丸みを帯びた新しい形で現れている。

14 Klein & Tubach 1994: 11f. (および 466 の写真下段の 1, 3 行および右欄外) 参照。Klein & Tubach は 1259/60 年の写本 (バルリン, Petermann I, 9; Hatch 1946: 225 参照) をこの種の合字の最初の出現例としているが、Kaufhold 1996: 59, n. 50 は 1243 年の写本 (Пигулевская 1960: 89 [no. XXII] 参照) にも例があることを指摘している。バルリンのトルファン出土断片の多くでは合字でない -t' が用いられているが、Maróth がそれぞれ 9 ~ 10 世紀, 10 世紀頃, 10 ~ 11 世紀のものとした SyrHT 1, 2, 360 をはじめ (Maróth 1984: 11, id. 1985: 283, id. 1991: 86), SyrHT 76 [合字でない -t' と混在], 94, 128, 221 [混在], 245, 255, 264, 274, 285, 393, n415, 420 などにもこの種の -t' の合字が見られる。同様の合字は、北京・台北写本 (註 8 参照) では写本全体を通して用いられ、ハラホト

典礼書のように教会や修道院で公に用いられる本と主に個人による使用を目的とする文書との違いも考慮する必要があるが¹⁵、ここで -t' の合字を判定の根拠とすることができるならば、資料 1789 は 13 世紀半ば以降のものと判断され、資料 2022 および 6221 もおそらくはモンゴル期のものではないかと考えられる。

以下で用いたシリア語のローマ字音写では、文字の読みが確実でない部分は斜体で示した。紙面に文字の痕跡が認められるが判読不能な場合はハイフン (-) で凡その文字数を示し、紙面が摩耗してインクの痕跡さえ見えない部分は空白とした。角括弧 (∩) は紙面自体が失われている部分を示す。i のように文字の上に付された点は複数記号 (syāmē) を表す。

1. 西域文化資料 1789 [10 x 5 cm]

断片の表面、裏面には下半分が失われた行を含めてそれぞれ 13 行の文字列が残る。表面、裏面ともに長方形の紙を縦長の方向に置いて書かれているが、表面と裏面では上下が逆になっている。断片の文字は走り書きの印象を与え、文字の大きさも一定ではない。通常は丸い点で示される複数記号や d と r を区別する記号はやや右上がりのハイフン状の線で示されている。

断片に残る文字は以下のように読める。

出土のシリア文字写本でも確認されるほか、キルギズ出土のキリスト教墓碑でも頻出する（ハラホト出土写本での例としては Пигулевская 1940: Таблица I [Syr. 16 (LXX) 横書き部分 6 行], Таблица II [Syr. 15 (LXXI) 縦書き部分 6 行], Таблица III, фиг. 1 [Syr. 17 verso (LXXII) 7 行, テキストはシリア文字ウイグル語, 合字があるのはシリア語からの借用語], Smelova 2015: 227 [Syr. 17 recto にもありとの報告, 図版なし], 230 [Syr. 21b, 縦書き部分 7 行], 231 [Syr. 21c, 右 6, 18, 25 行], 吉田順一・チメドドルジ 2008: 巻頭写真 9 頁 [H 彩 101], 13, 14, 23, 29, 33, 38, 44, 46, 47 行参照。キルギズの墓碑については Жумагулов 2011: 109, 147 [1336 年?], 214 [1285/6 年], 228 [1286/7 年], 230, 262 [1338 年], 296 [1337/8 年], 399, 401 [1301 年], 413 [1339 年, 以上は画像が比較的鮮明なもののみ], Desreumaux 2015: 247 [1301/2 年], 248 [1337/8 年], 252 [1264 年] など参照。写真が不鮮明だが、牛 2008: 64 にある新疆ウイグル自治区アルマリク出土の墓碑の -t' もおそらくはこの型)。

15 註 14 で挙げた -t' の合字が出現するベルリンの断片のうち、SyrHT 1 は薬学もしくは医術関係, SyrHT 2 は書簡, SyrHT 94 は教義論争, SyrHT 221 はおそらく個人用の祈祷書, SyrHT 255, n 415, n 420 は哲学関係, SyrHT 264 はおそらく暦関係, SyrHT 274 は護符, SyrHT 360 は聖人伝の断片である。SyrHT 76, 128 は公的な典礼書かは不明であり、はっきりと典礼書の一部とされているのは SyrHT 245 のみである。

表 1 bšm 'hyh // 2 'šr 'hyh // 3 rb'y l ml'k' // 4 hw dšl w' llky // 5 klhwn 'št' //
 6 w'rw't' w'hlyn // 7 rwḥ' byš' wly-- // 8. lwhw wbḥylmrh // 9 ṭrdn' lky 'w rwḥ' //
 10 byšt' 'pwll // 11 'lwhy pln mṭl // 12 dly 'lwhy šwṭn' // 13. -- m-l-l ---

[1-2] エフイエー・アシェル・エフイエーの名によって (?), [4] 天使たちの長 (?) である [3] 天使ラビエル (?) (の名によって?), [5] すべての熱病や [6] 悪寒 (?) とこれらの [7] 呪われた (?) 悪しき霊ども ... [8] そして, その主の力によって, [9-10] 悪霊よ, わたしはおまえを追い払う. [10-11] 「誰それ」を襲うな (?). [11] なぜなら [12] わたし (?) はその者に対して権限を持っている ...

裏 1 d'y l -tn-- // 2 b' l ' ' hn' wš' l // 3 mn 'lh' wyb // 4 lh š' lth kn 'mr //
 5 hkn' bywm' ryn // 6 qdyš' dḥdbšb' // 7 dbh mštryn wnb- // 8 yn wbtlyn klhwn //
 9 'bd' byš' wš' r // 10 - m--- // 11 - ḥb -- // 12 ---- --- m-l- //
 13 -' --- --- w y

[1] ... いかなる (?) ... [2] この ... のなかで ... [2-3] そして, (彼) は神に願った. [3] (神) は彼の願いを適え, [4-5] そして, このように言った. [8-9] すべての悪しき行いが [7-8] 解消し, 過ぎ去り (?), 無となる [5-6] 聖なる日曜の日に ...

内容は病気や悪霊から身を守る護符の祈祷文である. この種の護符は中東地域において非常に古い歴史をもち, 教会指導者たちによる禁止にもかかわらず¹⁶, シリア語典礼諸教会の信徒, 特にアッシリア東方教会信徒の間では民間療法的な医術の一環としてごく最近まで用いられてきた¹⁷.

このようなシリア語の護符の使用は中央アジア以東のキリスト教徒の間でも広く行われていたようであり, ベルリンのトルファン文書でも少なくとも 6 群のシリア語護符の断片があるほか¹⁸, ハラホト出土のシリア語文書の中にも 2 点の護符が確認される¹⁹.

16 このような護符の使用に対するシリア語での批判の初期 (5 世紀) の例については, Moriggi 2016 参照.

17 Hunter 2009, Al-Jeloo 2012 参照.

18 Hunter 2012a: 85-88, ead. 2013, Hunter & Dickens 2014: 453. トルファン出土シリア文字ソグド語断片 E8 [C49] も同様の護符の一部である可能性については Sims-Williams 2012: 50 参照.

19 Smelova 2015: 227f. (Syr. 17 recto) および武藤 2008, id. 2016 (H 彩 101) 参照.

古い時代のシリア語の護符祈祷文で本断片に比較的時代が近いものとしては大英図書館 (BL) 所蔵写本 Add. 14653 (9～10世紀) のものがあるほか²⁰, さらに古い時代のシリア語で記された魔除けとしては, Gignoux が校訂したフランス国立図書館 (BnF) の3点 (Syr. 400/1-3, 革製, 6～7世紀?)²¹ や Naveh (1997) が紹介した革製のもの²², Naveh & Shaked が紹介した銀板²³, 最近 Moriggi (2014) が再校訂した49点の陶器の椀 (incantation bowls) などがある。

シリア語の護符用祈祷文としては Gollancz が校訂したものがよく知られる (Gollancz 1912). Gollancz が使用したものも含め, 現存する祈祷文の写本の多くは18世紀頃以降にクルディスタン地方 (主にトルコ東部とイラン北西部) で書き写されたものだが, 祈祷文の内容や類型は古い時代に遡るものであり, 本断片の判読・解釈の際にも参考となる。この種の写本は, 聖書や典礼書などのように教会や修道院で公に用いられる写本とは異なり, ほぼすべて個人所有のものであったため, 西欧や北米の図書館のシリア語写本コレクションに含まれるものの数は比較的少ないが²⁴, 最近では, 主に第一次世界大戦中にキリスト教徒の大虐殺が行われたトルコ東部からイラクやシリア, 英国に移住したアッシリア東方教会信徒の個人蔵のものとしてこの種の写本が数多く存在することが報告されているほか²⁵, ロシアやアルメニア, グルジアにもクルディスタン地方から移住したアッシリア東方教会信徒がもたらした写本が数多くあることが確認される²⁶。

護符用の祈祷文を記したシリア語の写本の中には主に祈祷文の例文集として用い

20 Hunter 2013: 35-37 参照。

21 Gignoux 1987. BnF Syr. 400/3 についての最近の研究としては Korsvoll & Lied 2016 参照。

22 Moriggi 2014: 98 n. 177 によれば現在エルサレムの聖書の土地博物館所蔵。

23 Naveh & Shaked 1998: 62-68 (Amulet 6), 296f. (additions and corrections) および Plate 5 参照。

24 Hunter 1987: 83, ead. 1993: 244f. n. 8, ead. 1999: 162f. 参照。

25 Al-Jeloo 2012: 458, 483f. 参照。Al-Jeloo (ibid. 461f., 485-487) はウルミアのアメリカ人宣教師の学校 (Oroomiah College) にあった写本コレクション (写本の多くは第一次世界大戦中に散逸) にも同種の写本が少なからず含まれていたことも指摘している。

26 Пигулевская 1960: 128-130 (サンクトペテルブルク, 東洋写本研究soおよびロシア国立図書館, no. XXXIX: 17/18 世紀, XL: 1882 年書写), Teule & Kessel 2012: 48f., 52f., 57, 59, 64, 69, 70 (サンクトペテルブルク, ミハイル・サド・コレクション, no. 1 [1714 年], no. 5 [1791 年], no. 6 [1893 年], no. 11 [1905 年], no. 14 [1907 もしくは 1901 年], no. 20 [1922 年], no. 26: [1932 年], no. 27 [1935 年]), Гараева 2003 (ロシア科学アカデミー・カザン科学センター中央科学図書館, 1736 年), Мещерская 1981 (エレヴァン・マテナダラン図書館, no. 10 [1748/9 年], no. 19 [18 世紀], no. 72a [1755 年], no. 72b), Schmidt & Abousamra 2014: 246f. (マテナダランに計6点, トビリシにも2点ありとの報告) 参照。

られた冊子体のものと²⁷、紙を折畳んだり、帯状につなぎ合わせた紙を巻いたりして実際に身に着けたものがある²⁸。本断片はその縦長の形状に加えて、表と裏で上下が逆になっていることや表面 10 行目にある折り目の跡から考えて実際に護符として用いられたものの一部と考えられる²⁹。

護符に用いられる祈祷文は、多くの場合、特定の聖人と結びつけられており³⁰、祈祷文の前半ではその聖人にまつわる奇跡譚などが紹介され、後半に実際に悪霊などを追い払う祈りの文言が記される場合がある。一つの護符に複数の祈祷文が記される場合もあるが、本断片の表面と裏面にあるのが同一の祈祷文であれば、裏面が祈祷文の前半、表面が祈祷文の後半に属する可能性が高い。また、実際の悪霊追放の文言は、しばしば聖人が悪霊に対して発する言葉の形で書かれる。表面 11 行以降の「わたし」という部分の解釈が正しければ、本断片表面の文章もそのような形式に従ったものと考えられる。

下で詳述するように、本断片の文章には誤写と判断せざるを得ない箇所が多々あり、これを書き写した者はシリア語をほとんど解せなかったのではないかと推測される。特に、表面 11 行目の「誰それ」(plān) という語は実際に護符を使用する者の名前に置き換えるべきところだが³¹、断片の写字生はそのことさえも理解してい

27 冊子体のものも、例文集として使用するほかに、寝台の枕の下に置くなどして実際にお守りとして用いることがあったという (Lyavdansky 2011: 15)。

28 巻物状の護符の寸法について、例えば、マテナダラン所蔵の 3 点のうち、no. 72a は 8 x 258 cm, no. 726 は 8 x 218 cm, no. 9-90 は一部が失われた不完全なものだが、残存部分は 5.50 x 115.8 cm と報告されている (Мещерская 1981: 103f., Schmidt & Abousamra 2014: 146)。Al-Jeloo 2012: 490 に写真が掲載されている護符の長さもそれを手にしている男性の身長を優に超える。

29 ベルリンのトルファン出土シリア語護符の断片では、SyrHT 99 や n 364 に同様の折り目が見られ、n 364-365 は表と裏で上下が逆になっている (それぞれの断片については Hunter & Dickens 2014: 116, 399-401 参照)。ハラホト出土の H 彩 101 にも折り跡が見られる。

30 護符における聖人の扱いについては Hunter 1987 参照。後代の護符に最もよく登場する聖人は聖ギワルギス (ゲオルギオス) である (ibid. 84)。聖人が殉教の直前に自分に助けを求める者をさまざまな害悪から守ることを約束したと伝える聖ギワルギス伝の断片はトルファンでもシリア語、ソグド語、ウイグル語で見つかっており (Hunter & Dickens 2014: 111-113, 321-326, 336f. [SyrHT 95, 359-365, 381], Sims-Williams 2012: 68-72 [E23], Zieme 2015a: 93-97 [MIK III 194]; ソグド語訳については吉田「中国、トルファン」も参照)、福建省霞浦県で発見されたマニ教文書にまでキリスト教の聖ギワルギス伝に基づく『吉思呪』という祈りが含まれる (林 2014: 471f., id. 2015: 130-134, 馬 2016)。このような聖ギワルギス崇敬の普及は護符におけるその役割と結びつけることができるかもしれない。

31 Hunter 1993: 247 参照。

なかった可能性がある。

[表 1-2] 「エフイェー・アシェル・エフイェー」 ('hyh 'šr 'hyh) は聖書『出エジプト記』3:14 の「わたしはあるという者だ」というヘブライ語文の音写であり、神名として用いられる。Gollancz が校訂した護符祈祷文集でも 11 回の用例があるほか、ハラホト出土の護符の一つ (H 彩 101) でも用いられている³²。Gollancz のテキストでは 'hyh 'šrhhyh あるいは 'hyh 'šr hyh という、アーラフ (') が一つ欠落した形で現われるが、ハラホト出土の護符では、ここと同じように 'hyh 'šr 'hyh というヘブライ語に忠実な形が保たれている。また、Gollancz のテキストではほとんどの場合 'hyh 'šrhhyh の後に「エルシャツダイ、アドナイ、万軍 (サバオト) の主」という神名が続くが、ハラホトの護符および本断片にはそれらの神名はない³³。断片の最初の語は 2 文字目と 3 文字目の上半分が欠けて確認できないが、bšm [b-šem] 「(の) 名によって」である可能性が高い³⁴。

[3-4] 「天使たちの長 (?) である天使ラビエル (?)」: 断片 3 行目の冒頭の文字列は rb'yl と読める。シリア語の護符では BnF Syr. 400/1 に rbyl という天使名が見られるが³⁵、稀な名であり、Syr. 400/1 でも護符の冒頭で羅列される多数の天使名の一つであって、単独で現れるような名ではない。やや大胆な推測であるが、gbr'yl 「ガブリエル」の誤写の可能性を提起しておく。次行の hw dšl も意味をなさないが、hw drš [haw d-rēš] あるいは hw rš [<d>-hū rēš] の誤写である可能性が考えられる。d と r は形状が類似しているため、dr → r あるいは d → r の誤写は十

32 Gollancz 1912: 3 (A§5, 11 行), 5 (§7, 13 行), 6 (§8, 5 行), 8 (§10, 1-2 行), 10 (§13, 12 行), 22 (§36, 1-2 行), 32 (§53, 6 行), 38 (B§4/9, 6 行), 77 (C§1, 10 行), 79 (§3, 3 行), 83 (§10, 10 行)。武藤 2008: 236 (30 行), id. 2016: 148f. Gollancz および武藤が校訂した護符以外でも, Hazard 1893: 284 (21 行, MS Harvard, Syr. 159; ハーバードの写本における他の用例については Goshen-Gottstein 1979: 103 参照), Hunter 1993: 251 (MS Oxford, Syr. g. 3 (R)), Schmidt & Abousamra 2014: 152f. (106, 127-128 行) などに用例が見られる。

33 逆により古い時期 (7 世紀以前?) のシリア語の魔除けでは、ボドメール図書館の腕 (no. 51) に「アドナイ、サバオト、エルシャツダイ」(Moriggi 2014: 97, no. 18, 8), Naveh が紹介した革製の護符に「恐るべきアドナイ、サバオト、主」(dhyl' 'dwny šb'wty mry') とあるが (Naveh 1997: 34, 8 行), この 2 点に 'hyh 'šr 'hyh はない。ユダヤ教アラム語の腕では, Shaked, Ford & Bhayro 2013: 178 (JBA 34, 3), 193 (JBA 40, 6) に 'hyh 'šr 'hyh の用例が見られる (ibid. 141 [JBA 25, 10], 246 [JBA 55, 9] には 'hyh 一回だけの用例もあり)。

34 Gollancz 1912 のテキストでも 3, 8, 22, 32, 38, 77, 79, 83 頁の用例で bšm 'hyh 'šrhhyh, 6 頁では šm 'hyh 'šrhhyh という形が確認される。

35 Gignoux 1987: 10 (9 行), 20 参照。Gignoux はこの名がヘブライ語で出現する rbwyl 「ラビエル」という天使名 (Schwab 1897: 243 [355]) に相当する可能性を指摘する。

分に考えられ、§の末尾が長めに書かれていた場合、この部分を1と見間違えることはありうる。ハラホト出土の護符でも「エフイェー・アシェル・エフイェー」とある次の行(31行)にガブリエルの名が見え、Gollanczが校訂したテキストでも、ガブリエルはもっとも頻繁に言及される天使であるほか、「天使たちの長ガブリエル」という表現も2度確認される³⁶。w'lkkyはml'k'の誤写と考える。1～2行の神名と天使名の間では、少なくとも接続詞w-「および」、おそらくはwbšm [wa-b-šem]「および...の名によって」あるいはそれ以上の語が欠落しているものと考えられる。

[5-6]「すべての熱病と悪寒(?)」:「すべての熱病」という場合、「すべて」は複数女性語尾を伴い、「熱病」は複数形で現れて、klhyn 'štwt' [kōlhēn eššātawātā]となることが期待されるが、ここでは「すべて」は複数男性語尾を伴い、「熱病」は単数形で現れている³⁷。続く6行目の冒頭で接続詞w-に続く'rw't'という語は、「(熱による)震え、悪寒」を意味する'rywt' ['rāyūtā]の誤写であろうと思われる。

[7-8]「呪われた(?)悪しき霊ども」:「霊」(rūhā)は女性名詞であるため、形容詞byš'も女性形でbyšt' [単数 bīštā, 複数 bīšātā]とあるべきところである(9-10行参照)。名詞、形容詞ともに複数記号がないが、直前のw'hlynのように見える文字列は、whlyn [w-hālēn]「およびこれらの」あるいはwklhyn [w-kōlhēn]「およびすべての」の誤写と思われる。「これら」/「すべての」は「霊」にかかるもの考えられるため、複数で解釈する。byš'に続く語は後半が薄れて判読不能だが、前半はwly-もしくはw'y-と読め、接続詞w-に続く語はlyt' [lītā/ lītē]「呪われた」であった可能性が考えられる。

[8] 行頭の文字はlwhwと読めるがこの文脈での意味は見出せない。直後の「そして、彼の主の力によって」という言葉との関係からは、「彼によって」(すなわち「天使ラビエル/ガブリエル(の名・力)によって」?)という意味の言葉が期待される。他に何らかの語が欠落していないのであれば、lwhwを'lwhy ['law(hy)]と修正する可能性が考えられる。

[9]「わたしは追い払う」(tāred-nā):護符における悪霊等に対する行為については、「縛る」(esar)という動詞がもっとも多く用いられるが、「追い払う」(trad)も頻繁

36 Gollancz 1912: 15 (A§20, 9行: Gabriyel rēš malakē), 81 (C§7, 3行: Gabriyel rēšeh d-malakē). Gollancz 1912: 91 (C§27, 8行)でも、ガブリエルの名は明示されていないが、「かの偉大なる天使、聖なる天使たちの長」(hw m'lk' [lege ml'k'] rb' ršh d-m'lk' [lege d-ml'k'] qdyš')という表現がある。

37 「すべて」が「熱病」と「悪寒」の両方にかかっている場合でも、ともに女性名詞であるため、語尾は複数女性形であるべきである。

に用いられる³⁸.

- [9-10]「悪霊」：ここでは名詞 *rwḥ'* に複数記号が付されているが、形容詞 *byšt'* には付されていない。「お前を」と訳した *lky* [*lek*] はやや不鮮明であるが、明らかに複数形 (*lkyn* [*lkēn*]) ではないため、「悪霊」も単数と解釈する。
- [11]「襲うな」(?) : *'pwll* は意味をなさない。やや大胆な修正だが、否定辞を補い、アーラフ(ʿ)を *t* と読み替え、*ll* を *l* として、*l' t'pwll* [*lā teppōl*] とすれば意味は通じる。直前の *byšt'* の *-t'* は *l'* と形状が類似しているため、重字脱落 (*haplography*) によって *l'* が欠落した可能性は考えられる。女性名詞である「悪霊」に対する命令(禁止)としては、*l' t'plyn* [*lā tepplīn*] とあるべきだが、文法上の性の不一致はこれ以前にも見られるため、2人称として解釈する。*l' t'pwll* [*lā teppōl*] を3人称単数女性形として、「(悪霊が)襲わないように」と読むことも可能である。
- [裏1] 行頭の語の後半は薄れてインクの痕跡も見えないが、*d'ylyn* [間接文を導く小辞 *d* + *aylēn* 「どの?」(複数)] の可能性が考えられる。
- [2]「...のなかで」：2行の最初の語は *b'l'--* と読み、*b'l'l'* [*b-'al'ālā*] 「(この)竜巻のなかで」の可能性が考えられるが、5行の *hkn'* に見られるように、この断片では語中形の *n* と *k* もエー(ʿ)とほぼ同じ形で現れるので確信が持てない。
- [3]「彼の願いを適え」：直訳「彼に彼の願い事を与え」。 *wyb* は *wyhb* [*w-ya(h)b*] 「そして与えた」の誤りであろう。同じ語彙を用いた *hbly š'lt'* [*hab-lī še(')ltā*] 「(神よ)私の願いを適えたまえ」(直訳「私に願い事を与えたまえ」)という表現はトルファン出土護符断片 *SyrHT 99* にも見られ、*Gollancz* のテキストでも確認できる³⁹。
- [5] 行末の語の最初の文字は後から挿入されたものと見られ、他の文字と比べて極めて小さく書かれている。字母の上に点が付されており、*r* と読めるが、文脈から考えて *d* の誤写とし、語全体は小辞 *dyn* [*dēn*] として読むべきであろう。
- [5-6]「聖なる日曜の日」(*yawmā qaddīšā d-ḥadbšabbā*)：この文言からは安息日としての日曜日を守らない者には様々な害悪がもたらされ、守る者には祝福が与えられるとする『天から降りてきた書簡』に見られる伝承との関係が連想される⁴⁰。

38 *Gollancz 1912*: 7, 12, 31 (A§9, 5-6行, §16, 12-13行, §52, 24-25行) など。シリア語でのこのような遂行的発話における分詞構文の使用については *Rogland 2001* 参照。

39 *Gollancz 1912*: 3 (A§5, 4行), *Hunter 2013*: 31 参照。

40 「聖なる日曜の日」という表現については *Hall 1889*, 39 (10行: *yawmeh d-ḥadbšabbā qaddīšā*), 40 (8行: 同左), 41 (14-15行: 同左), *id. 1893*: 127 (2行: *yawmā dīl(y) qaddīšā d-ḥadbš[abbā]*), 129 (3行: *yawmā qaddīšā d-ḥadbšabbā*), 131 (3行: *yawmā d-ḥadbšabbā qaddīšā dīl(y)*) 参照。日曜を守る者を病気から守るという神の約束については *Hall 1893*: 131, 4-5行参照。『天からの書簡』の伝承については *Baumstark 1922*: 71 Anm. 1, 347, *van Esbroek 1989* 参照。

- [7]「解消し」: mštr̄n と読んだ語のšは他の箇所とのšと形が異なるうえ、その上に点が付されて Pael 形動詞の分詞のような表記となっているが、そのような語は存在しない。次行の bāt̄līn との組合せなども考慮して meštr̄n と読むべきであろう⁴¹。
- [7-8]「過ぎ去り (?)」: meštr̄n と bāt̄līn の間の二つ目の動詞は判読できない。接続詞 w- に続く文字は n のように見えるが、もしこれがエー (‘) の誤写であれば、‘bryn [‘ābrīn] の可能性が考えられる⁴²。この動詞は行をまたいで書かれている。シリア語でこのように一語を二行に分けて書くのは例外的だが、幅の狭い紙に書かれた護符では同様の例が見られる⁴³。
- [9]「行い」: ‘bd̄ は ‘bādē 「行い」(複数)と ‘abdē 「しもべたち」の二つの読み方が可能だが、関連する動詞に鑑みて、「行い」とするのが妥当であろう。

2. 西域文化資料 2022

高さ約 10 センチの断片である。断片は左右にちぎれて、最下部でかろうじてつながっている。すなわち、現在、断片が保存され、撮影された形で表面とされている面を表面とすると、断片全体は以下の 4 部分からなる。

表 B	表 A
裏 A	裏 B

表 A と表 B, あるいは裏 A と裏 B の間には断裂部分の形状が符合しそうな箇所があり、左右を接合できそうに見えるが、そこで接合すると下部の結合部分との位置関係に無理が生じる。また、表 A 上部では「その憐みによって」という言葉が確認され、神に 3 人称で言及している可能性が高いのに対し、接合した場合に表 B でその次行に来る箇所には「あなたの」という語尾があり、神に 2 人称で語り掛けている可能性が高く、文意がつながりそうにない。したがって、断片の 4 部分はそれぞれ別々のページに属していたものと判断する。

表 B の左端や裏 A の右端には紙の折り目の痕跡が見られ、また、裏 B と表 A の間、

41 meštr̄n と bāt̄līn の組合せの例としては、Reinink 1993: 21 (偽メトディオス『黙示録』10.2) 参照: w-bāh meštr̄n w-bāt̄līn kōl-rēš w-kōl-šultānā 「それによってすべての支配とすべての権力は解消し、無となる」。

42 「行い」が「解消し、過ぎ去る」という表現が用いられている箇所としては『使徒行録』5:38 参照: hādē maḥšabtā w-hānā ‘bādā meštr̄n w-‘ābrīn。

43 幅 5.5 cm と報告されるマテナダラン所蔵の護符 (9-90) では、198 行中に 22 回一語が二行にまたがる箇所が確認される (Schmidt & Abousamra 2014: 149–156)。

裏 A と表 B の間には断裂部分の形状が符合しそうな箇所があり、そこで接合した場合には、断片下部の結合部分との位置関係にも齟齬はない。したがって、断片が元々 1 枚の紙であった場合、4 つのページの配置は以下のようになっていたものと思われる。

元 X 面：裏 B 表 A

元 Y 面：裏 A 表 B

その場合、紙の表裏をなす裏 A と表 A、裏 B と表 B はそれぞれその順番で連続のページをなしていたこととなる。裏 A・表 A と裏 B・表 B のどちらが冊子のなかで先にあったかは、折り目の方向がわかれば判断できるが、写真での判定は難しい。紙を冊子体にする際には数枚の紙を重ねて綴じるため⁴⁴、表 A と裏 B もしくは表 B と裏 A が連続のページをなしていたかも現時点では不明である。ただし、裏 B の紙面の摩耗がもっとも激しく、表 B は比較的よく保存されていることなどから考えて、断片は、一定の時間、裏 B が露出し、表 B が内側を向いた状態に置かれていた可能性が高い。この状態が元の冊子中での紙の向きを反映するものであれば、4 部分の順番は裏 B、表 B、裏 A、表 A となる。

A、B とともに、表面で見て、右側（行頭）でどれだけの紙面が失われているかは定かでない。左端では、表 A では 4～8 行、表 B では 1～7 行の末尾が残っているようである。A の下部および裏 B では紙面の摩耗が激しく、文字が書かれていた形跡はあるが、判読はほぼ不可能である。裏 B では、上から 3 行目辺りにエー(‘), 次行にアーラフ(‘)らしき文字の痕跡があるが、それ以上の判読は難しい。

以下の音写中の下線は色が薄く、元は朱書されていたと思われる文字、ピリオド(.) は句読点と思しき記号を示す。

表 B

- 1 [] š- []'
- 2 [] wkl m[]n
- 3 []ksy' ' - 'nk'w šbyh'
- 4 []mry' d-- --t' mšb
- 5 []s. mš. b[] m--'
- 6 []lk' []-- []- -wl'
- 7 []š[] '--'
- 8 [] -

44 シリア語写本では紙を 5 枚ずつ重ねて折り、20 ページを 1 帖 (quire) とするのが通常である。

9[]-

- [2] ... すべての ... [3] 隠れた (?) / あなたの ... / おお (?), 賛美すべき ...
 [4] 主たる・主の ... 賛美すべき (?) ... [7] ... 大地 (?)

[3] 上で '-nk とした語は、特に2字目が現在残る形ではシリア文字にない形をしており、判読できない。続く2字も -ln-, l', -'n- などの可能性があり、残念ながら語意を推定できない。ただし、語末の -k は接尾辞「あなたの」(-āk) である可能性が高い。

[3] 「おお (?), 賛美すべき」: 'w は -呼びかけの「おお」と接続詞「あるいは」の両方の可能性がある。šbyh' [šbīhā] と読んだ語は、y の字があるべきところで語が切れているようにも見えるが、紙面が削れてインクが消えたものと考えられる。h とアーラフ (') の間に y があるようにも見えるため、'wšb hy' [awšeb hayyē] 「伸ばす / 命」と読む可能性も考えられるが、awšeb は「手を伸ばす・差し伸べる」という意味の動詞で、命などを「延ばす」という意味での用例はなく、ここでは意味がつかない。

[4] 行末から二つ目の語の末尾は -t' と読めるが、t の垂直部分が右上に向かって弧を描く独特な形をしている。これと同じように右に傾いた t は Hunter & Dickens が Hudra H と呼ぶ写本に属する断片にしばしば現れ⁴⁵、特に SyrHT 237 recto の tešbōhtā という語の末尾にここにあるのとよく似た形の -t' がある。

[4] 「賛美すべき (?)」: 行末の mšb は「(風を) 吹かせる」(maššeb) という動詞とも読めるが、文脈に合いそうにない。mšbh' [mšabbhā], mšbh' [mšabbahā] 「賛美される」という語が省略形で書かれているか、行をまたいで書かれている可能性が考えられる。

[6] 語頭が欠けた lk' は mlk' [malkā] 「王」である可能性が考えられる。

[7] 「大地 (?)」: 行末の語は、語末のアーラフ (') の前にエー (') の痕跡らしき形状が見えるため、'r' [ar'ā] ではないかと思われる。

45 Hunter & Dickens 2014: 450f. 参照。これと類似した形状の文字として、Psalter B および Hudra D に属する断片 (ibid. 447, 449 参照) では上部が右に曲がった l が頻出する (“upper stroke of l culminates in right-hand hook”, ibid. 66; この形の l については Dickens 2013: 11 も参照)。ただし、Hudra H, Psalter B, Hudra H のいずれの筆跡もその他の点では資料 2022 のものとは異なっており、資料 2022 と同一の写字生によるものとは思われない。

裏 A

- 1 []-' -mr-[]
- 2 []-yn wš-[]
- 3 []-' m. h[] []
- 4 [] š l' -- -l-[]
- 5 [] -l' []
- 6 [] []--' -'d[]
- 7 [] w m []-[]
- 8 [] - []-k []
- 9 [] -' sg-' wm-šb []
- 10 [] []h' b. m. []
- 11 [] -y--l. - []
- 12 [] m-r' []-- []
- 13 [] --' - []
- 14 [] m--- []
- 15 [] -- [] -[]
- 16 [] h-- -- []

[9] ... 多くの (?) / 計算する・考える (?) ...

[9] 「多くの (?)」: 語頭に sg-, 語末にアーラフ (') が見え, sgy'' [saggī'ā] 「多くの」, もしくは sgyd' [sgīd'] 「崇拝される・すべき」という語の可能性が考えられる.

[9] 「計算する・考える」: m らしき字と š の間にもう一文字あるのか定かでないが, wmhšb [w-mahšeb] の可能性が考えられる.

表 A

- 1 [] n --- []
- 2 [] qdyš' []
- 3 []-[]' lhw []
- 4 []' wb'r' nh--'
- 5 [] wbr/mwhy
- 6 [] mr'
- 7 []-[] mrhmn--
- 8 [] l m' n [] t' dsgwā-

9 []---wtyn mšbh- []

10 []' p--md w-- []

11 []--' --- --- [] []

12 [] - --- -n' []

13 [] ----

14 [] -- [] mlyn

[2] 聖なる・聖人 ... [4] ... および地上に ... [5] ... その憐みによって [6] ... 主
(?) [7] ... 憐み(?) [8] ... 崇拜者たち(?) [9] ... 賛美する・すべき(?) ... [14]
... に満ちた(?)

[6] 「主(?)」: mr とアーラフ (') の間にインクの痕跡を確認できないが、アーラフは語末形で前の文字とつながっていたように見える。空白に見える部分に文字があったのであれば, mry' [māryā] 「主」の可能性が考えられる。

[7] 「憐み(?)」: 語末部分が不鮮明なうえ, n と読んだ文字の上に穴が開いていて n であるか確認できないが, mrḥmwt' [mraḥmānūtā] 「憐み」ではないかと思われる。

[8] 「崇拜者たち(?)」: 語末部分が不鮮明だが, sāgōdē 「崇拜者たち」か, これに語尾が付された形と思われる。護符の一部とされるベルリン・トルファン断片 SyrHT 337 には sāgōdaw(hy) 「彼の崇拜者たち」という語が見られる⁴⁶。

[9] 「賛美する・すべき(?)」: 語末部分が不鮮明で数と性がわからないが, 動詞 šabbah 「栄光を帰する, 賛美する」の能動分詞もしくは受動分詞 (mšabbah, mšabbhā, mšabbhīn など) であろう (分詞から派生した形容詞 mšabbhānā の可能性もある)⁴⁷。

表 A にある「聖なる・聖人」, 「その憐みによって」などのいくつかの意味が確実な単語から資料 2022 が宗教的な文書の断片であることは確かだが, それ以上の内容の判断は現時点では難しい。表 B5 行と裏 A 3 行には朱書されていたと思われる文字があり, 何らかの見出しであった可能性が高い。また, 表 B5 行では朱書された語の前に紙面の摩耗による欠損があり, その前に独立形と思しき b がある。裏 A 10 行でも独立形の b と m があり, それぞれの後に句読点がある。何らかの略号であるか, 数字 b = 2, m = 40 として章節番号などを表している可能性が考えられる。

46 Hunter & Dickens 2014: 311 参照。

47 この型の動詞は能動分詞と受動分詞が同形となるが, 単数男性では「神」などと一致する受動分詞, 複数では「人々」などと一致する能動分詞である場合が多い。

このような要素からは資料 2022 が次に扱う資料 6221 と同種の文書であることも想像しうる。

3. 西域文化資料 6221 [5.5 x 4.5 cm]

この断片の表面は『龍谷大学図書館蔵大谷探検隊将来西域文化資料選』（1989: 65）ですでに紹介されている。残存部分には赤いインクで記された升目の中にシリア語アルファベットの最初の 5 文字が 2 文字ずつの組合せで記されている。各行の冒頭部分（右側、下のローマ字音写では左側）は失われているが、行頭も含めると残存部分の 5 行には以下の文字が記されていたものと推測される。

- 1 [' '] b ' g ' d ' h
- 2 [b ' b] b b g g d d h h
- 3 [g ' g] b g g d d h h
- 4 [d ' d] b d g d d h h
- 5 [h ' h] b h g h d h h

シリア語のアルファベットは 22 文字から成るが、断片では以上の文字列の左と下に空白の升目があるため、記されていたのはもともとアルファベットの最初の 5 文字のみの組合せであった可能性が高い。シリア文字には後続の文字とつなげて書かれるものとそうでないものがあり、ここにある 5 文字のうち b と g は本来次の文字とつなげて書かれるべきものだが、断片の 2 行目と 3 行目では、b と g も後続の文字とつながらずに独立形で記されている。断片の最上部には、1 行目の 'h の上に文字の跡が認められるため、残る 5 行以前にも文字が書かれていたものと思われるが、そこに何が書かれていたかは不明である。

断片の裏面では以下の文字を読み取ることができる。

- 1 [] ps[] - []
- 2 [] byš wmn hlyn p-- []
- 3 [] --- --yn -hr lk ---[]
- 4 [] -- b- nyš- --- ' tryn b--l-[]
- 5 [] ---- ' š-- []
- 6 [] ' lyt- --- byš' []
- 7 [] -yš' zd--- --- --yn -[]

8 [] tr̄yn - [] -- [] lyn - []

9 [] -- m [] -' -g -- []

10 [] -- - [] --' []

... [2] 悪い. そして, これらのうち ... [3] ... あなたに・あなたを ... [4]

... しるし (?) ... 二の ... [6] ... 呪われた ... 悪い ... [8] 二の ...

[1] 1行目に残る文字は不鮮明だが, ps- と読め, ps' [pessā] 「籤」という語などの可能性が考えられる.

[9] m [] -' : 語の中央で紙面が欠けているが, 欠損部分の後に t の下部らしき跡があり, mnt' [mnātā] 「部分」, mlt' [melltā] 「言葉」などの可能性が考えられる.

シリア文字は数字としても用いられ, 断片表面にあるアーラフ (') からへー (h) までの5文字は1~5に相当する. そのため, 表面にあるのは何らかの数表の一部である可能性がまず考えられる. トルファン出土のシリア文字文書ではいくつかの暦表の断片が確認されているが⁴⁸, 「1-1, 1-2, 1-3, ... 5-5」という数字の羅列に暦との関連を見出すのは難しい. 断片の裏面に「二」という語が2度現れているため, 裏面の文は表面の数表と関係する可能性が高いが, 裏面にある「悪い」, 「呪われた」という語からは占いと関連する文脈が連想される.

トルファンで発見されたキリスト教文書のなかで占いに関わるものとしてはシリア文字ソグド語断片 E26/5-6 の雷, 地震, 虹などの自然現象を予兆として用いる占いや⁴⁹, シリア文字ウイグル語断片 U 328 (クルトカ出土) の一月のうちのそれぞれの日の吉凶を記したリストや干支による人 (おそらくは結婚相手) の相性を示すリストなどがある⁵⁰. トルファンおよび敦煌でキリスト教の使徒や聖人に帰された言葉を用いた占い (sortes apostolorum/sanctorum) が行われていたことは, 敦煌出土のソグド文字ソグド語断片 (BL Or. 8212/182) とトルファン・ブライク出土のウイグ

48 Dickens & Sims-Williams 2012 参照. クルトカ出土のシリア語断片には1~7の数字に当たる ' ~ z の文字が縦に並んで繰り返し書かれており, 7つの曜日に対応する可能性が指摘されている (Hunter & Dickens 2014: 296-298, SyrHT 321, 323).

49 Sims-Williams 1995: 291-301, id. 2015: 41-55 参照. Sims-Williams は E26/5-6 にある占いと BL Or. 2084 (1755/5 年書写, Furlani 1918 参照) や後出の Or. 4434 (46v-58v, Furlani 1921a 参照) にあるシリア語の占いとの類似を指摘している. トルファン出土の漢文文書 (Ch 1830 およびイスタンブール大学出口コレクション 330) にも日月蝕や地震を予兆とする占いの例が見られる (西脇 2002: 140-165 参照. この例については吉田豊教授に指摘をいただいた).

50 Zieme 2002: 390, id. 2015a: 113-117, Hunter & Dickens 2014: 490f. 参照.

ル文字ウイグル語断片 (U 320, U 187a, U 5179) から確認される⁵¹。特にこの最後の例では占い文に番号が付されていることやそれぞれの占いが「良い」、「悪い」と定義されている点にここでの断片との類似性が感じられる。

現存するシリア語の *sortes apostolorum* の例としては Furlani が紹介したものがあり (BL Or. 4434, 41v–46v, 19 世紀書写), その冒頭近くには赤い線で仕切った升目に「全被造物の救いのためにマリアから現れたイエス・キリスト」という言葉が y, š, w, '... と一文字ずつ記された表があると報告されている⁵²。シリア語 (もしくはシリア文字現代アラム語)⁵³ の写本で, 升目に 1 から始まる数字が順番に書かれた表を含むものとしては, 同じ写本 (Or. 4434, 58v–78r) にある「福音書占い」や Al-Jeloo 2012 に写真が掲載された 2 点の「占いの書」がある⁵⁴。また, サンクトペテルブルクのミハイル・サド・コレクションの写本 (7 番, 1900 年書写) にある「籤占い」(lot divination) では, 合計 55 の占い文に d-d-d から始まり, ' -b, ' -g, ' -d, b-b- ' ... と続く, アーラフ (') からダーラト (d) までの 4 文字を 3 文字ずつ連ねた符号が欄外に付されている⁵⁵。数を用いた占いないし診断の例としては, 名前に用いられる

51 それぞれ, Sims-Williams 1976: 63–65, id. 2009: 286 と Zieme 2015a: 119–123 を参照。ヨハネとユダの二人の使徒の名が認められる西域文化資料 2497 (註 1 参照) もこの種の文書である可能性が考えられる。このほかに, 敦煌出土のチベット語の占いの書 (BnF, Pelliot tibétain 351) にイエス・キリストの名 (i ši myi ši ha) や「神の右手の裁き手」, 「七層の天」という表現があることについて, キリスト教の占いからの影響の可能性が指摘されている (Uray 1983: 412–419, id. 1987: 202, 205f., Chen 2009: 209 参照)。

52 Furlani 1923: 358 参照。ただし, この占いは「聖なる使徒たちの籤」(pessē da-šlīḥē qaddīšē) というタイトルが付されているものの, それぞれの占い文が使徒や聖人に帰されているわけではない。

53 アラム語の口語をシリア文字で表記する習慣は 17 世紀にイラク北部で始まり, 特にアッシリア東方教会の信徒の間では 19 世紀後半にイラン北西部のウルミア方言を基礎として成立した標準語がいまでも文章語として用いられる。Al-Jeloo 2012: 489 図 4 の写本 (1981 年書写) にある占い集は古典シリア語からそのようなシリア文字表記の現代アラム語に翻訳されたものとのことである (ibid. 461 参照)。

54 Furlani 1921b: 72 および Al-Jeloo 2012: 489 参照。ただし, Furlani が紹介した表にあるのは 1 から 72 まで, Al-Jeloo 2012: 489 の図 3 の写本と図 4 の写本の左ページにあるのは 1 から 71 まで, 図 4 の写本の右ページにあるのは 1 から 20 の数字で, 本断片にあるような 1 から 5 の数字の組合せではない。

55 Grigory Kessel 氏の教示による (Teule & Kessel 2012: 53f. 参照)。1～4 までの 3 連の数を用いた占いは, 西域では, 敦煌で発見された古テュルク語の占いの書 Īrq bitig (Thomsen 1912: 190–214 および Plate II, Tekin 1993, Rybatzki & Hu 2015 など参照) や, トルファン出土ソグド語文書 (Reck 2006: 124–126, ead. 2010: 72 参照), 同じくトルファン (およびマザルタグ) 出土チベット語文書 (Francke 1924: 7–12, id. 1928 参照) にも見られる (以上については吉田豊教授より指摘をいただいた)。このような占いはイスラーム圏でも行われてきた。アラビア語で 'bgd [= 1～4] の 4 文字を 3 ずつ付した占いと

文字を数字としてその和を算出し、その和から特定の数を引いたり、和を特定の数で割ることによって得た答えで、病気の種類と、その病気にどの修道院のどの聖人の護符が有効かなどを判断する数霊術的な医術書も知られる⁵⁶。

ここまでに挙げたシリア語の占いは18世紀以降の写本から知られるものだが、ギリシア語では、サド・コレクション写本にあるのと同じように1-1-1, 1-1-2, ... 6-6-6 (ααα, ααβ, ... ζζζ) という番号が占い文に振られた例がパピルスで残る古代末期(4～5世紀?) エジプトの「ホメロス占い」にも見られ⁵⁷、数表を用いた占いの例も同じパピルス集のなかに見出されるため⁵⁸、似たような形態の占いが東地中海・中東地域においても非常に古い歴史を持つことは間違いない。

このような事例に照らして、資料6221も何らかの形で数を用いた占い・診断に関わる書の一部である可能性が考えられる。ただし、上述の1から4ないし6までの数の組合せを用いる占いは賽子の使用と関連付けることができるのに対して、資料6221の表にある1～5という数を賽子と結びつけるのは難しいなどの問題があり、表の用途についてはさらなる検討を要する⁵⁹。

しては遅くとも14世紀の事例が知られ (Bodl. 133, fol. 163v–169r, 『ジャアファル占い (al-qur‘a al-ġa‘ farīya)』, 1397/8年頃書写, Nicoll-Pusey 1835: 276, Flügel 1860: 48, 52 参照。ジャアファル・アッ＝サーディクに帰せられる占いについては Massé 1958, Fahd 1966: 222–224, Michot 2000: 175–177, 339 など参照)。イブン・タイミーヤ (1263年～1328年) も同様の占いに言及している (Michot 2000: 192 参照。イスラーム世界における籤や賽子を用いた占い [sortilege] 全般については Savage-Smith 2004: xxxiii f. 参照)。このような占いで1～4という数の組合せは細長(四角柱)の賽の使用と関連付けられる (Francke 1928: 114f., Savage-Smith 1997: 150, 158, Reck 2010: 72, Rybatzki 2010: 88 参照)。

56 Hall 1893: 137–142 (Harvard, Syr. 166, 1885年書写; 写本については Goshen-Gottstein 1979: 106 参照), Hunter 2009: 192f., 195–198 (John Rylands Library, Syr. 52B, 1794/5年書写), Al-Jeloo 2012: 464 参照。

57 Preisendanz 1974: 1–6 [PGM VII 1–148], Betz 1986: 112–119, Maltomini 1995 および Zografou 2013 参照。

58 Preisendanz 1974: 81 [PGM XII 351–364], Betz 1986: 165f., Maltomini 1986, Barry 1999: 99 参照。以上2点のギリシア語の例については田中創氏より指摘をいただいた。

59 ここで、5 x 5程度の数の升目に数字や文字が並んでいるという点では魔術数を用いたアラビア語の魔除け (Canaan 1937–38 参照) などとの形状の類似、1～5という数については、その和である15を表す文字 (YH, シリア語でも同様) が神名につながることからこれらの数に特別な意味を与えたユダヤ教の伝統 (Lippman 1834: 31, Golancz 1912: xvi 参照) と通じる可能性などが想起されるが、それ以外に資料6221をそれぞれの伝統と関連付ける根拠はいまのところ見出せない。

おわりに

以上で扱った3点の断片のうち、資料2022については残念ながら文章の性格を断定できなかったが、資料1789については魔除けの護符の一部であることを確認し、資料6221も占いの書の一部である可能性を指摘した。

いまから30年余り前、Hageは当時知られていたトルファン出土のキリスト教文書のなかに民間信仰的な要素が見られないことを指摘し、同時にこれがトルファンにおけるキリスト教の全体像を示すものではなかろうことも予見した⁶⁰。ここまでに見てきたように、トルファン、敦煌、ハラホトの3地域で出土したキリスト教文書のなかに医術や魔術、占いに関わる文書がそれなりの数あることはその後の研究によって明らかになっている⁶¹。龍谷大学所蔵のシリア語断片は、中央アジア以東に広まったキリスト教のこのような「非公式」な側面に関わる資料として、信徒たちの実際の信仰の在り方について考察する際の新たな材料を提供してくれるものである。筆者の能力の限界もあり、ここでは主に他のシリア語文献との関係で3点の断片について論じたが、今後はソグド語やウイグル語を含む西域出土キリスト教文献全体のなかでのこれらの断片の位置づけや、仏教やマニ教を含むトルファンおよび西域一帯の宗教世界のより広い文脈のなかでこれらの断片や類似の文献が有する意義について研究が深められていくことを期待する。

60 Hage 1987: 57: „... Wir müssen hier also wenigstens den Verdacht äußern, daß unser zunächst günstiges Urteil über die Nestorianer in der Turfan-Oase nicht der ganzen Wahrheit entspricht, weil es die Frömmigkeit des Kirchenvolks in seinem Alltag nicht einbeziehen kann.“

61 註3で触れたブライクの遺構の性格との関係では、魔術や占いに関する文書は修道院跡とされるブライク以外で発見されたものが比較的多いことが注目されるが、ブライク出土とされる文書にも護符などの断片は含まれる。

参考文献

- Al-Jeloo, Nicholas. 2012. “Kaldāyūtā: The Spar-Sammāné and Late Antique Syriac Astrology”, *ARAM*, 24, 457–492.
- Barbati, Chiara. 2015. « La documentation sogdienne chrétienne et le monastère de Bulaïq », dans Pier Giorgio Borbone & Pierre Marsone (éds), *Le christianisme syriaque en Asie centrale et en Chine*, Paris : Geuthner, 89–120.
- Barry, Kieren. 1999. *The Greek Qabalah: Alphabetic Mysticism in the Ancient World*, York Beach (ME): Samuel Weiser.
- Baumstark, Anton. 1922. *Geschichte der syrischen Literatur mit Ausschluß der christlich-palästinensischen Texte*, Bonn: A. Marcus und E. Webers Verlag.
- Betz, Hans Dieter (ed.). 1986. *The Greek Magical Papyri in Translation Including the Demotic Spells*, Chicago: The University of Chicago Press.
- Canaan, Tewfik. 1937–38. “The Decipherment of Arabic Talismans”, *Berytus Archaeological Studies*, 4, 69–110 および 5, 141–151.
- Chen, Huaiyu. 2009. “The Encounter of Nestorian Christianity with Tantric Buddhism in Medieval China”, in Dietmar W. Winkler & Li Tang (eds.), *Hidden Treasures and Intercultural Encounters: Studies in East Syriac Christianity in China and Central Asia*, Wien: LIT, 195–213.
- Desreumaux, Alain. 2015. « La collection des pierres tombales syro-orientales du Turkestan conservés à Paris et à Lyon », dans Pier Giorgio Borbone & Pierre Marsone (éds), *Le christianisme syriaque en Asie centrale et en Chine*, Paris : Geuthner, 237–256.
- Dickens, Mark. 2013. “Scribal Practices in the Turfan Christian Community”, *Journal of the Canadian Society for Syriac Studies*, 13, 3–28.
- Dickens, Mark, & Nicholas Sims-Williams (with contributions by Thomas A. Carlson and Christiane Reck). 2012. “Christian Calendrical Fragments from Turfan”, in Jonathan Ben Dov et al. (eds.), *Living the Lunar Calendar*, Oxford: Oxbow Books, 269–296.
- 段晴. 2000. 「敦煌新出土叙利亞文釋讀報告（續篇）」, 『敦煌研究』, 第 66 期（2000 年第 4 期）, 120–126.
- Duan Qing. 2001. „Bericht über ein neuentdecktes syrisches Dokument aus Dunhuang/China“, *Oriens Christianus*, 85, 84–93.
- Fahd, Toufic. 1966. *La divination arabe. Études religieuses, sociologiques et folkloriques sur le milieu natif de l’Islam*, Leiden: Brill.

- Flügel, Gustav. 1860. „Über die Loosbücher der Muhammadaner“, *Berichte über die Verhandlungen der Königlich Sächsischen Gesellschaft der Wissenschaften zu Leipzig, Philologisch-historische Classe*, 13, 24–74.
- Francke, A. H. 1924. „Tibetische Handschriftenfunde aus Turfan“, *Sitzungsberichte der Preussischen Akademie der Wissenschaften*, 1924, 5–20, Tafel I–III.
- Francke, A. H. 1928. „Drei weitere Blätter des tibetischen Losbuches von Turfan“, *Sitzungsberichte der Preussischen Akademie der Wissenschaften*, 1928, 110–118.
- Furlani, Giuseppe. 1918. “Di una raccolta di trattati astrologici in lingua siriana”, *Rivista degli studi orientali*, 7, 885–889.
- Furlani, G. 1921a. „Astrologisches aus syrischen Handschriften“, *Zeitschrift der Deutschen Mongenländischen Gesellschaft*, 75, 122–128.
- Furlani, Giuseppe. 1921b. “Un trattato evangelomantico in lingua siriana”, *Giornale della Società Asiatica Italiana*, 29, 71–95.
- Furlani, Giuseppe. 1923. “Una recensione siriana delle Sortes apostolorum”, *Atti del Reale Istituto Veneto di scienze, lettere ed arti*, 82/2, 357–363.
- Гараева, Нурия. 2003. «Рукопись сирийская, содержит заклинания и молитвы», *Эхо веков*, 3/4, 47–53 [www.archive.gov.tatarstan.ru/magazine/go/anonymous/main/?path=mg:/numbers/2003_3_4/02/02_5/にて閲覧].
- Gignoux, Philippe. 1987. *Incantations magiques syriaques*, Louvain : Peeters.
- Gollancz, Hermann. 1912. *The Book of Protection, Being a Collection of Charms, Now Edited for the First Time from Syriac Mss.*, London: Frowde.
- Goshen-Gottstein, Moshe H. 1979. *Syriac Manuscripts in the Harvard College Library. A Catalogue*, Missoula: Scholars Press.
- Hage, Wolfgang. 1987. „Das Christentum in der Turfan-Oase“, in Walther Heissig & Hans-Joachim Klimkeit (Hrsg.), *Synkretismus in den Religionen Zentralasiens. Ergebnisse eines Kolloquiums vom 24. 5. Bis 26. 5. 1983 in St. Augustin bei Bonn*, Wiesbaden: Harrassowitz, 46–57.
- Hall, Isaac H. 1889. “The Extremity of the Romans: and Praise before the Holy Mysteries: Syriac Texts and Translations”, *Journal of the American Oriental Society*, 13, 34–56.
- Hall, Isaac H. 1893. “The Letter of Holy Sunday”, *Journal of the American Oriental Society*, 15, 121–142.
- Hatch, William Henry Paine. 1946. *An Album of Dated Syriac Manuscripts*, Boston: The American Academy of Arts and Sciences.
- Hazard, Willis Hatfield. 1893. “A Syriac Charm”, *Journal of the American Oriental Society*,

- 15, 284–296.
- Hunter, E. C. D. 1987. “Saints in Syriac Anathemas: A Form-Critical Analysis of Role”, *Journal of Semitic Studies*, 31/1, 83–104.
- Hunter, Erica C. D. 1993. “A Scroll Amulet from Kurdistan”, *ARAM*, 5, 243–254.
- Hunter, Erica. 2009. “Magic and Medicine among the Christians of Kurdistan”, in ead. (ed.), *The Christian Heritage of Iraq: Collected Papers from the Christianity in Iraq I-V Seminar Days*, Piscataway: Gorgias Press, 187–202.
- Hunter, Erica C. D. 2012a. “Syriac, Sogdian and Old Uyghur Manuscripts from Bulayiq”, in Academia Turfanica (ed.), *The History behind the Languages: Essays of Turfan Forum on Old Languages of the Silk Road* 語言背后的歷史 西域古典語言學高峰論壇論文集, 上海古籍出版社, 160–164.
- Hunter, Erica C. D. 2012b. “The Christian Library from Turfan: Syr HT 41-42-43 an Early Exemplar of the Ḥudrā”, *Hugoye: Journal of Syriac Studies*, 15/2, 301–351.
- Hunter, Erica C. D. 2013. “Traversing Time and Location: A Prayer-Amulet of Mar Tamsis from Turfan”, in Li Tang & Dietmar W. Winkler (eds.), *From the Oxus River to the Chinese Shore: Studies on East Syriac Christianity in China and Central Asia*, Wien: LIT, 25–41.
- Hunter, Erica C. D. 2016. “Commemorating the Saints at Turfan”, in Li Tang & Dietmar W. Winkler (eds.), *Winds of Jingjiao: Studies on Syriac Christianity in China and Central Asia*, Wien: LIT, 89–103.
- Hunter, Erica C. D., & Mark Dickens. 2014. *Syriac Texts from the Berlin Turfan Collection* (Verzeichnis der orientalischen Handschriften in Deutschland V/2), Stuttgart: Steiner.
- Жумагулов, Четин. 2011. *Кыргызстандагы несториан-түрк жазуу эстеликтери (XI-II-XIV кылымдар)*, Бишкек: Ч. Айтматов атындагы Тил жана адабият институту.
- Kaufhold, Hubert. 1996. „Anmerkungen zur Veröffentlichung eines syrischen Lektionarfragments“, *Zeitschrift der Deutschen Mongenländischen Gesellschaft*, 146, 49–60.
- Klein, Wassilios, & Jürgen Tubach. 1994. „Ein syrisch-christliches Fragment aus Dunhuang/China“, *Zeitschrift der Deutschen Mongenländischen Gesellschaft*, 144, 1–13, 446 (図版).
- Korsvoll, Nils Hallvard, & Liv Ingeborg Lied. 2016. “Enoch and Baruch: Unusual Suspects in a Syriac Amulet”, *Journal of Near Eastern Studies*, 75/2, 349–360.
- 百濟康義, ヴェルナー・ズンダーマン, 吉田豊. 1997. 『イラン語断片集成 大谷探検隊収集・龍谷大学所蔵中央アジア出土イラン語資料』(龍谷大学善本叢書

- 17), 法藏館.
- 林悟殊. 2014. 『摩尼教華化補說』, 蘭州大学出版社.
- 林悟殊. 2015. 「福建霞浦抄本元代天主教贊詩辨釋 — 附: 霞浦抄本景教《吉思呪》考略」, 『西域研究』, 2015年第4期, 115–134.
- Lippmann, G. H. 1834. *Sepher Haschem oder das Buch über den vierbuchstabigen Namen Gottes, von Rabbi Abraham Aben Esra*, Fürth.
- Lyavdansky, Alexey. 2011. “Syriac Charms in Near Eastern Context: Tracing the Origin of Formulas”, T. A. Mikhailova et al. (eds.), *Oral Charms in Structural and Comparative Light: Proceedings of the Conference of the International Society for Folk Narrative Research’s (ISFNR) Committee on Charms, Charmers and Charming, 27–29th October 2011, Moscow*, Moscow: PROBEL-2000, 15–20.
- 馬小鶴. 2016. 「粟特文《聖喬治受難記》與《吉思呪》— 霞浦文書《摩尼光佛》研究」, 『國際漢學研究通訊』, 12, 45–75.
- Maltomini, Franco. 1986. “Appunti magici”, *Zeitschrift für Papyrologie und Epigraphik*, 66, 157–160.
- Maltomini, Franco. 1995. “P. Lond. 121 (=PGM VII), 1-221: Homeromanteion”, *Zeitschrift für Papyrologie und Epigraphik*, 106, 107–122.
- Maróth, Miklós. 1984. „Ein Fragment eines syrischen pharmazeutischen Rezeptbuches aus Turfan“, *Altorientalische Forschungen*, 11, 115–125.
- Maróth, Miklós. 1985. „Ein Brief aus Turfan“, *Altorientalische Forschungen*, 12, 283–287.
- Maróth, Miklós. 1991. „Eine unbekannte Version der Georgios-Legende aus Turfan“, *Altorientalische Forschungen*, 18, 86–108.
- Massé, H. 1958. “Fāl-nāma”, *The Encyclopaedia of Islam*, new edition, vol. 4, Leiden: Brill, 760–761.
- Мещерская, Е. Н. 1981. «Сирийские заклинательные сборники из Матенадарана», *Палестинский сборник*, 27 [90], 93–105.
- Meshcherskaya, E. N. 1996. “The Syriac Fragments in the N. N. Krotkov Collection”, in Ronald E. Emmerick et al. (eds.), *Turfan, Khotan und Dunhuang*, Berlin: Akademie Verlag, 221–227.
- Мещерская, Е. Н. 1998. «Фрагменты сирийской рукописи из собрания Института востоковедения РАН», *Православный палестинский сборник*, 35 [98], 148–158.
- Michot, Yahya J. 2000. “Ibn Taymiyya on Astrology: Annotated Translation of Three Fatwas”, *Journal of Islamic Studies*, 11/2, 147–208.
- Moriggi, Marco. 2014. *A Corpus of Syriac Incantation Bowls. Syriac Magical Texts from*

- Late-Antique Mesopotamia* (Magical and Religious Literature of Late Antiquity 3), Leiden: Brill.
- Moriggi, Marco. 2016. ““And the Impure and Abominable Priests Fled for Help to the Names of the Devils”: Amulets and Magical Practices in Syriac Christian Culture between Late Antiquity and the Modern World”, *Hugoye: Journal of Syriac Studies* 19/2, 371–384.
- Muraviev, Alexey. 2012. “The New Persian Marriage Contract in the Manuscript from Turfan”, in Academia Turfanica (ed.), *The History behind the Languages: Essays of Turfan Forum on Old Languages of the Silk Road* 語言背后的歷史 西域古典語言學高峰論壇論文集, 上海古籍出版社, 160–164.
- [武藤慎一]. 2008. 「シリア文字文書」, 吉田順一・チメドドルジ編 『ハラホト出土モンゴル文書の研究』, 雄山閣, 232–239 (巻頭写真9頁も参照).
- Muto, Shinichi. 2016. “The Exorcism in the Newly Found Khara-Khoto Syriac Document”, in Li Tang & Dietmar W. Winkler (eds.), *Winds of Jingjiao: Studies on Syriac Christianity in China and Central Asia*, Wien: LIT, 147–151.
- Naveh, Joseph. 1997. “A Syriac Amulet on Leather”, *Journal of Semitic Studies*, 41/1, 33–38.
- Naveh, Joseph, & Shaul Shaked. 1998. *Amulets and Magic Bowls: Aramaic Incantations of Late Antiquity*, third edition, Jerusalem: Magnes Press.
- Nicoll, Alexander, & E. B. Pusey. 1835. *Catalogi codicum manuscriptorum orientalium Bibliothecae bodleianae pars secunda arabicos complectens*, Oxonii.
- 西脇常記. 2002. 『ドイツ将来のトルファン漢語文書』, 京都大学学術出版会.
- 牛汝极. 2008. 『十字蓮花 中国元代叙利亞文景教碑銘文獻研究』, 上海古籍出版社.
- 彭金章, 王建軍, 敦煌研究院編. 2000. 『敦煌莫高窟北区石窟』, 第1卷, 文物出版社.
- Pigoulewsky, N. V. 1935–36. « Fragments syriaques et syro-turcs de Hara-Hoto et de Turfan », *Revue d’Orient chrétien*, 3e sér. 10 (30), 3–46.
- Пигулевская, Н. В. 1940. «Сирийские и сиро-тюркский фрагменты из Хара-Хото и Турфана (Из материалов Рукописного отдела Института востоковедения Академии Наук СССР)», *Советское востоковедение*, 1, 212–234.
- Пигулевская, Н. В. 1960. «Каталог сирийских рукописей Ленинграда», *Палестинский сборник*, 6 [69], 3–230.
- Preisendanz, Karl. 1974. *Papyri graecae magicae. Die griechischen Zauberpapyri*, Bd. II, 2. verbesserte Auflage, Stuttgart: Teubner.
- Reck, Christiane. 2006. *Berliner Turfanfragmente manichäischen Inhalts in soghdischer*

- Schrift* (Verzeichnis der orientalischen Handschriften in Deutschland XVIII/1), Stuttgart: Steiner.
- Reck, Christiane. 2010. “Some Remarks on the Manichaean Fragments in Sogdian Script in the Berlin Turfan Collection”, in Takashi Irisawa (ed.), *“The Way of Buddha” 2003: The 100th Anniversary of the Otani Mission and the 50th of the Research Society for Central Asian Cultures*, Kyoto: Ryukoku University, 69–74.
- Reinink, G. J. (Hrsg.). 1993. *Die syrische Apokalypse des Pseudo-Methodius* [textus] (Corpus scriptorum christianorum orientalium 540, syr. 220), Lovanii: Peeters.
- Rogland, Max. 2001. “Performative Utterances in Classical Syriac”, *Journal of Semitic Studies*, 46/1, 243–250.
- Rybatzki, Volker. 2010. “The Old Turkic ĩrq bitig and Divination in Central Asia”, in Matthias Kappler, Mark Kirchner & Peter Zieme (eds.), *Trans-Turkic Studies: Festschrift in Honour of Marcel Erdal*, Istanbul, 79–102.
- Rybatzki, Volker, & Hu Hong. 2015. “The ĩrq Bitig, the Book of Divination: New Discoveries concerning Its Structure and Content”, in Irina Nevskaya & Marcel Erdal (eds.), *Interpreting the Turkic Runiform Sources and the Position of the Altai Corpus*, Berlin: Klaus Schwarz Verlag, 149–173.
- 佐伯好郎. 1935. 『景教の研究』, 東方文化學院東京研究所.
- Saeki, P. Y. 1937. *The Nestorian Documents and Relics in China*, Tokyo: The Toho Bunkwa Gakuin.
- Savage-Smith, Emilie. 1997. “Divination”, in Francis Maddison & Emilie Savage-Smith, *Science, Tools & Magic* (The Nasser D. Khalili Collection of Islamic Art 12/1), 148–159.
- Savage-Smith, Emilie. 2004. “Introduction”, in ead. (ed.), *Magic and Divination in Early Islam*, Aldershot: Ashgate, xiii–li.
- Schmidt, Andrea, & Gaby Abousamra. 2014. « Une amulette syriaque dans la collection du Matenadaran à Yerevan (rouleau 9-90) », *The Harp: A Review of Syriac, Oriental and Ecumenical Studies*, 29, 143–164.
- Schwab, Moïse. 1897. « Vocabulaire de l’angéologie d’après les manuscrits hébreux de la Bibliothèque nationale », *Mémoires présentés par divers savants à l’Académie des inscriptions et belles-lettres de l’Institut de France*, 1re série, 10/2, 113–430.
- Shaked, Shaul, James Nathan Ford & Siam Bhayro. 2013. *Aramaic Bowl Spells: Jewish Aramaic Bowls*, vol. 1 (Magical and Religious Literature of Late Antiquity 1), Leiden: Brill.

- Sims-Williams, Nicholas. 1976. "The Sogdian Fragments of the British Library", *Indo-Iranian Journal*, 18, 43–74.
- Sims-Williams, Nicholas. 1995. "Christian Sogdian Texts from the Nachlass of Olaf Hansen II: Fragments of Polemic and Prognostics", *Bulletin of the School of Oriental and African Studies*, 57, 288–302.
- Sims-Williams, Nicholas. 2009. "Christian Literature in Middle Iranian Languages", in Ronald E. Emmerick & Maria Macuch (eds.), *The Literature of Pre-Islamic Iran (A History of Persian Literature 17)*, London: I. B. Tauris, 266–287.
- Sims-Williams, Nicholas. 2012. *Iranian Manuscripts in Syriac Script in the Berlin Turfan Collection* (Verzeichnis der orientalischen Handschriften in Deutschland XVIII/4), Stuttgart: Steiner.
- Sims-Williams, Nicholas. 2015. *The Life of Serapion and Other Christian Sogdian Texts from the Manuscripts E25 and E26* (Berliner Turfantexte 35), Turnhout: Brepols.
- Smelova, Natalia. 2015. « Manuscrits chrétiens de Qara Qoto : nouvelles perspectives de recherches », dans Pier Giorgio Borbone & Pierre Marsone (éds), *Le christianisme syriaque en Asie centrale et en Chine*, Paris : Geuthner, 215–236.
- Tang, Li. 2015. « Le christianisme syriaque dans la Chine des Mongols yuan : diffusion, statut des chrétiens et déclin (XIII^e-XIV^e siècles) », dans Pier Giorgio Borbone & Pierre Marsone (éds), *Le christianisme syriaque en Asie centrale et en Chine*, Paris : Geuthner, 63–88.
- Taylor, W. R. 1941. "Syriac Mss. Found in Peking, ca. 1925", *Journal of the American Oriental Society*, 61, 91–97.
- Tekin, Talat. 1993. *Irk Bitig: The Book of Omens* (Turcologica 18), Wiesbaden: Harrassowitz.
- Teule, Herman, & Grigory Kessel (in collaboration with Stephen Sado). 2012. "The Mikhail Sado Collection of Syriac Manuscripts in St. Petersburg", in Juan Pedro Monferrer-Sala, Herman Teule & Sofía Torallas Tovar (eds.), *Eastern Christians and Their Written Heritage: Manuscripts, Scribes and Context*, Leuven: Peeters, 43–76.
- Thomsen, Vilhelm. 1912. "Dr. M. A. Stein's Manuscripts in Turkish "Runic" Script from Miran and Tun-Huang", *Journal of the Royal Asiatic Society*, 1912, 181–227.
- Uray, G. 1983. "Tibet's Connection with Nestorianism and Manicheism in the 8th - 10th Centuries", in Ernst Steinkeller & Helmut Tauscher (eds.), *Contributions on Tibetan Language, History and Culture: Proceedings of the Csoma de Kőrös Symposium Held at Velm-Vienna, Austria, 13-19 September 1981*, vol. 1, Wien: Arbeitskreis für

tibetische und buddhistische Studien, Universität Wien, 399–432.

Uray, Géza. 1987. „Zu den Spuren des Nestorianismus und des Manichäismus im alten Tibet (8.-10. Jahrhundert)“, in Walther Heissig & Hans-Joachim Klimkeit (Hrsg.), *Synkretismus in den Religionen Zentralasiens*, Wiesbaden: Harrassowitz, 197–205.

van Esbroeck, Michel. 1989. « La lettre sur le dimanche descendue du ciel », *Analecta Bollandiana*, 107, 267–284.

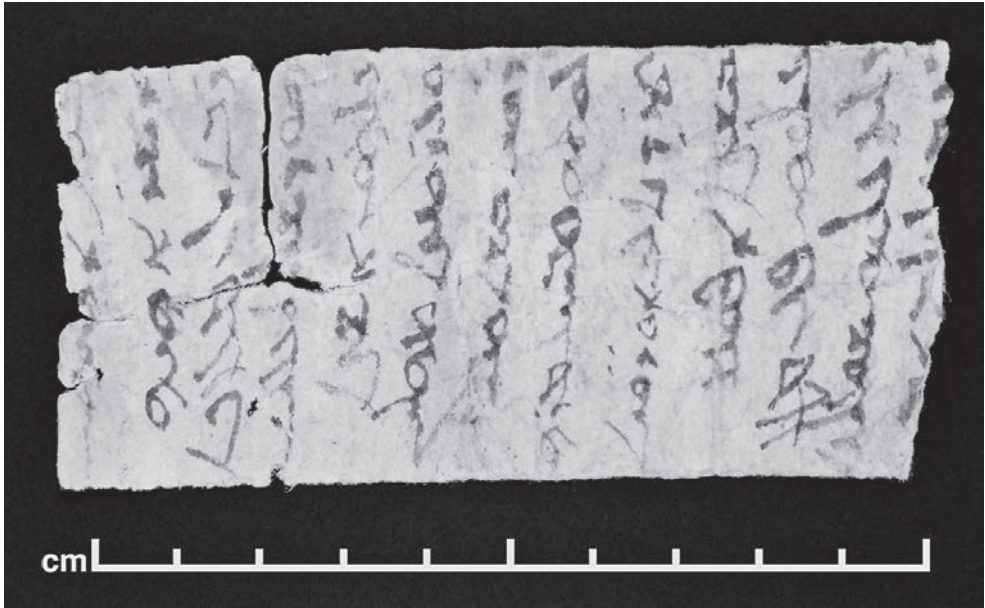
吉田順一・チメドルジ編. 2008. 『ハラホト出土モンゴル文書の研究』, 雄山閣.
吉田豊. 「中国, トルファンおよびソグディアナのソグド人景教徒 — 大谷探検隊将来西域文化資料 2497 が提起する問題 —」 (本書所収).

Zieme, Peter. 2002. „Türkische Zuckungsbücher“, in Ingeborg Hauenschild, Claus Schönig & Peter Zieme (Hrsg.), *Scripta Ottomanica et Res Altaicae. Festschrift für Barbara Kellner-Heinkele zu ihrem 60. Geburtstag*, Wiesbaden: Harrassowitz 380–393.

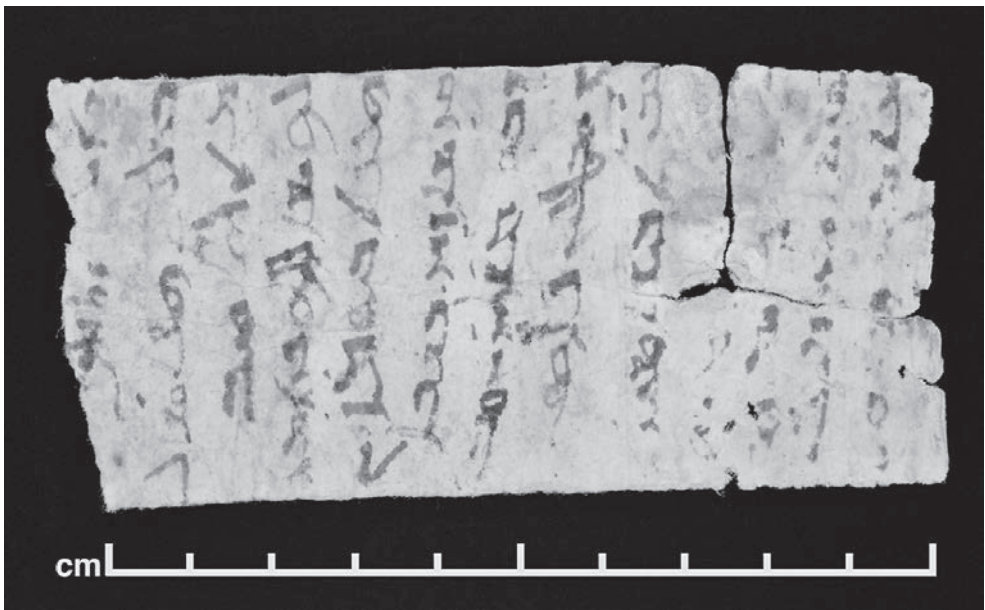
Zieme, Peter. 2015a. *Altuigurische Texte der Kirche des Ostens aus Zentralasien*, Piscataway: Gorgias Press.

Zieme, Peter. 2015b. „Ein altuigurisches Fragment eines Marientextes aus der Ötani-Sammlung der Bibliothek der Ryūkoku-Universität“, academia.edu にて公表 .

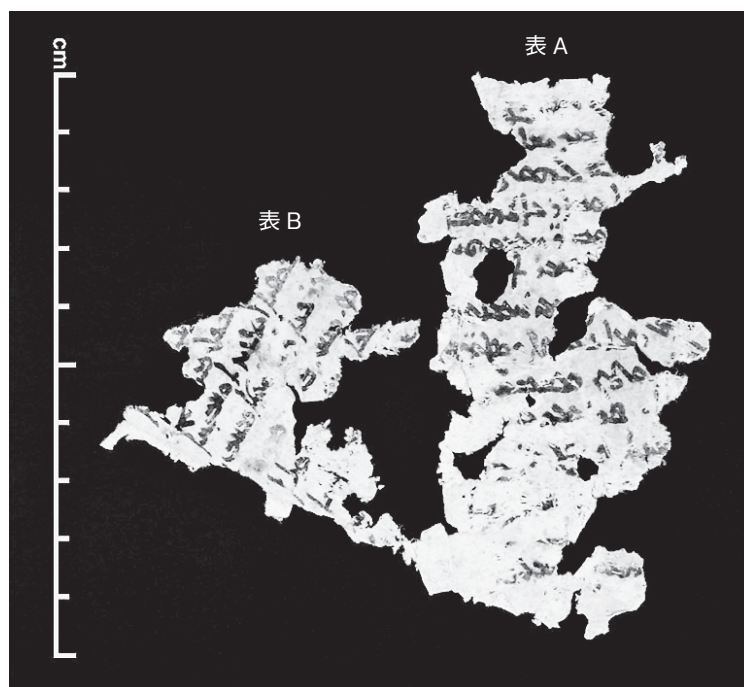
Zografou, Athanassia. 2013. « Un oracle homérique de l'Antiquité tardive », *Kernos*, 26, 173–190.



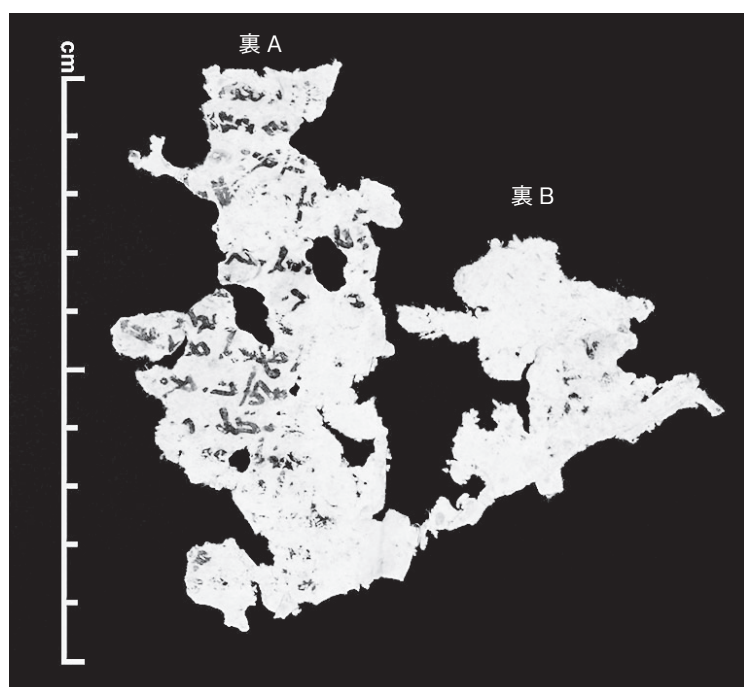
西域文化資料 1789 表



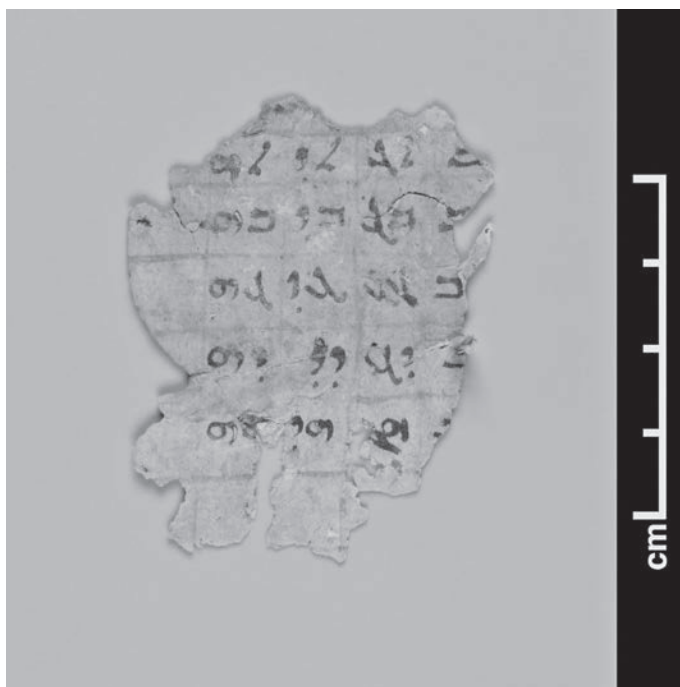
西域文化資料 1789 裏



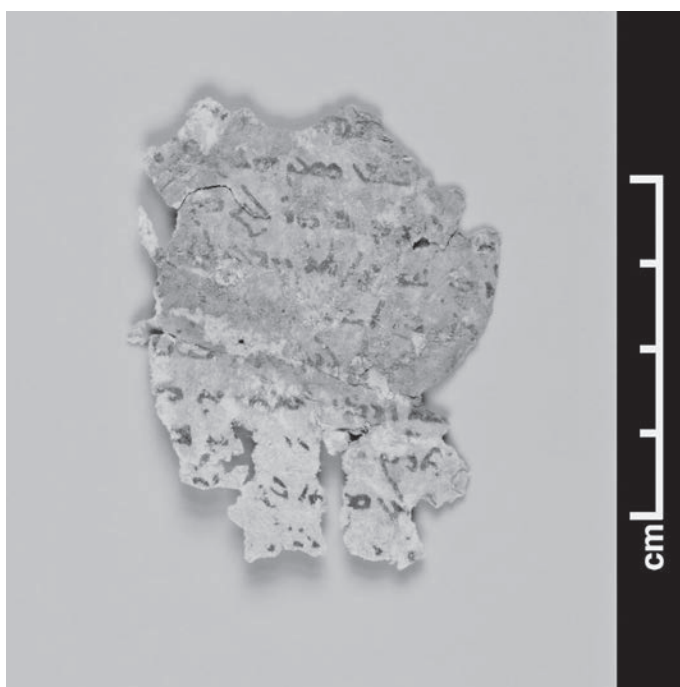
西域文化資料 2022



西域文化資料 2022



西域文化資料 6221 表



西域文化資料 6221 裏

執筆者紹介

- | | |
|-------------|---|
| 入澤 崇 | 龍谷大学文学部教授, 龍谷大学西域文化研究会代表 |
| 萩原祐敏 | 京都大学白眉センター准教授 |
| 慶 昭蓉 | Postdoctorante, Centre de recherche sur les civilisations de l'Asie orientale, France |
| Peter Zieme | 日本学術振興会外国人特別研究 (京都大学)
ベルリン＝ブランデンブルグ科学アカデミー・トルファン
研究所元所長, ベルリン自由大学名誉教授 |
| 松井 太 | 大阪大学文学研究科准教授 |
| 橘堂晃一 | 龍谷大学仏教文化研究所客員研究員 |
| 吉田 豊 | 京都大学文学研究科教授 |
| 高橋英海 | 東京大学大学院総合文化研究科教授 |

西域研究叢書

- 1 尚林・方廣鎔・榮新江共撰『中國所藏「大谷收藏品」概況：特別以敦煌寫經爲中心』
龍谷大學佛教文化研究所・西域研究會，1991.
- 2 龍谷大学仏教文化研究所・西域研究会『旅順博物館蔵新疆出土文物研究文集』
龍谷大学仏教文化研究所・西域研究会編，1993.
- 3 龍谷大学仏教文化研究所・西域研究会編 京都，『大谷探検隊資料：「旅行教範」
「探検指図書」「中亞旅行記」資料写真，移録，解説』
龍谷大学仏教文化研究所・西域研究会，1995.
- 4 旅順博物館・龍谷大学共編『中国旅順博物館蔵トルファン出土漢文仏典研究論文集』
京都，龍谷大学仏教文化研究所・西域研究会，2006.
- 5 旅順博物館・龍谷大学共編『旅順博物館所蔵新疆出土漢文浄土教写本集成』
京都，龍谷大学仏教文化研究所・西域研究会，2010.

龍谷大学西域研究叢書 6

『大谷探検隊収集西域胡語文献論叢 仏教・マニ教・景教』

2017年3月31日発行

編 集 入澤崇・橘堂晃一

発 行 龍谷大学仏教文化研究所西域文化研究会

龍谷大学世界仏教文化研究センター

〒600-8268 京都市下京区七条通大宮東入大工町125-1

TEL 075-343-3814

印刷製本 有限会社 真陽社

〒600-8475 京都市下京区油小路仏光寺上ル

TEL 075-351-6034